根本　かおる
（国際連合広報センター長）

国連にとって日本における大使館のような位置づけにある国連広報センターには、幅広い関係者から様々な依頼が寄せられます。とても全てに応えられませんが、そんな中で私自身が極力時間を割くようにしているのは、熱意ある子ども・若者たちとの接点です。

私は今年3月、ある全国紙の小学生向け新聞のこども記者たちから、「国際理解を促進し、多様性豊かな社会を作るには」をテーマにインタビュー取材を受ける機会がありました。「世界の現実を知っている人に直接話を聞きたい」と考えた小学生が、自分の身近にいる外国人のことを自分なりに調べて考えてきたうえで、私を訪ねてくれました。「まず目の前の人の考え方や気持ちをオープンマインドで受け止める」ということや「多様性や違いを楽しむ」という姿勢についてお話したところ、こども記者と私との間で化学反応のような共感が生まれました。それがきっかけとなり、全国の12のこども新聞のこども記者たちが集まる「こども新聞サミット」にもコメンテーターとしてお邪魔したのですが、プロの記者のアドバイスを受けながら身近な社会課題を掘り下げて考え抜いて、子どもたちはチームですばらしい発表をしていました。今年4月からは、世界で起きていることと自分の足元の課題とを結びつけて関心をもってほしいという思いを込めて、小学生向けの新聞で月に1回「国連を伝える仕事」をテーマに寄稿を連載しています。毎回子どもたちにどんなメッセージを伝えようかとやりがいを感じながら書いています。

今年7月に発表された国連の「世界人口推計２０２４年版」によると、世界人口全体で15歳未満は4人に1人、15歳から24歳の若者層は6・5人に1人にあたり、30歳未満は世界人口全体の半分にもなります。数のうえでこれだけ大きな割合を占める若い世代の意見や願いにしっかり耳を傾け、彼ら・彼女らが自分たちに影響する政策の決定に関われる仕組みをより積極的に築いていくことは急務です。若者たちが国連での議論や政策の決定に制度的に関われるよう担保するべく、23年には「国連ユース・オフィス」が国連事務総長直属の組織として新設され、ウルグアイ出身の32歳（当時）の初代ユース課題担当国連事務次長補が同オフィスのトップとして任命されています。今年9月の国連総会ハイレベルウィークで開催される「未来サミット」の成果文書の「未来のための協定」にも、国レベルそして国際レベルの双方で若者が政策決定に関われるよう制度化を促進することが盛り込まれることに

巻頭言　子どもたちは「きょうのリーダー」

なっています。さらに、これから生まれてくる将来世代に関する宣言も協定の附属文書として採択される予定です。

日本の学校教育のカリキュラムに盛り込まれて生徒・児童たちが幅広く学んでいる「持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）」は、子ども・若者世代を含め「誰一人取り残さない」という社会包摂に基づく大原則を掲げています。これを政策決定の観点から捉え直すと、「nothing about us, without us（私たちに関することを私たち抜きで決めないで）」ということになります。特に気候危機は、子ども・若者世代の将来の暮らしや安全を大きく左右します。スウェーデンの気候活動家のグレタ・トゥーンベリさんに代表される若い世代からの声が、気候変動をめぐる難しい交渉を動かすテコになってきたことからも、彼ら・彼女らが当事者として関わることは不可欠です。

気候変動を人類の生存を脅かす最も深刻な脅威だとするグテーレス国連事務総長は、積極的に子ども・若者世代と対話し、若い世代からの懸念や希望の声を吸い上げ、自身を鼓舞する力にしています。さらに、自分の子孫の暮らしやウェルビーイングがこのままではどうなってしまうだろうかと積極的にイメージしながら、２１００年を生きる自分の曾々孫たちから「なぜ気候危機を知りながら、手を打たなかったのか」と言われないようにするためにも、世界各国の政治リーダーたちに温室効果ガスの大幅削減に向けた政治的な決断と具体的なアクションを求めて奔走しています。

こうしたグテーレス事務総長の姿勢から強く感じるのは、フラットな世代間の対話が若い世代にとっても大人世代にとっても非常に重要だということ、そして安心できる安全な環境の中で正解のない問いかけについて意見を出し合って一緒に考える力を早くから子どもが身につける機会が大切だということです。

今年4月に日本財団が公表した「国や社会に対する意識」に関する6か国（日米英中韓印）対象の18歳意識調査では、日本は「自分には人に誇れる個性がある」と考える割合で53パーセント、「自分の行動で、国や社会を変えられると思う」割合で46パーセントにとどまるなど、他国の若者に比べ日本の若者の自己肯定感や自己評価が低い実態が数字に表れています。若い世代の閉そく感が固定化してしまう前に、モヤモヤ感をシェアし、成功も失敗も経験しながらもがいてきた大人から「大丈夫！」と背中を押してもらう機会がもっとあれば、と思うのは私だけでしょうか。